

平成31（令和元）年度

事業報告書

平成31年4月1日から

令和2年3月31日まで

公益財団法人

タカミヤ・マリバー環境保護財団

概 況

公益財団法人タカミヤ・マリバー環境保護財団は、令和2年3月31日を持って、当年度諸事業は全て終了しました。

ご承知のように、年度末に新型コロナウイルス感染症という未曾有の災いが世界中を覆い、この北九州市でも、経済、医療、教育、環境、福祉、他で市民生活に大きな影響が出ました。

そうした中であって、当財団事業の幾つかに若干の影響が見られましたが、概ね、認定事業は計画通り、遂行出来たものと思っております。

公益目的事業

- I. 河川・海岸の美化推進事業
- II. 水生生物の生態研究及び保護・育成事業及び海域の水産資源保護増殖事業
- III. 河川及び海岸線愛護、水生生物の研究・増殖、水辺の青少年とのふれあい事業を行う団体に対する助成事業
- IV. 河川及び海岸線愛護、水生生物の研究・増殖、水辺の青少年とのふれあいに関するシンポジウム・環境教育
- V. 北九州市環境ミュージアムの運営

I. 河川・海岸線の美化推進事業

1. 市民参加による水辺環境美化事業

平成31年度（令和元年度）は、財団主催、及び共催により、地域住民や小学校児童など、一般市民も参加しての河川・海岸線美化清掃事業を13回実施しました。

内訳は、紫川、大蔵川、金山川を中心とした年間7回の河川清掃活動と小倉日明海岸、門司海岸、若松響灘海岸を中心とした6回の海岸線の美化清掃活動を実施しました。

2. マリバー号による事業

マリバー号は、軽塵収集車で街宣設備を有し、乗務員2名により月曜から金曜までの毎日、北九州市内の海岸線、河川へ出動しています。

活動の内容は、市民への環境美化の呼び掛け運動、乗務員による清掃、ゴミ収集及び処理、広大な北九州市内海岸部、河川に投棄される不法廃棄物の監視、など、以下の報告の通りです。平成31年4月1日から令和2年3月31日にかけて実施致しました内容は次のとおりです。

① 事業実施期間

平成31年4月1日（月）～令和2年3月31日（火）

② 実施地域（マリバー号巡回地域）

海岸線エリア

ア. 脇田海岸エリア

イ. 響灘エリア

ウ. 戸畑・若松エリア

エ. 日明エリア

オ. 砂津・末広エリア

カ. 太刀浦エリア

キ. 門司港・和布刈エリア

ク. 新門司北エリア

北九州市内河川流域

1 城内川 2 砂津川 3 神嶽川 4 紫川① 5 紫川② 6 小熊野川

7 長行山田川 8 紫川③ 9 立花川 10 井手浦川 11 母原川 12 茶屋川

13 志井川 14 村中川 15 大川 16 羽山川 17 清滝川 18 奥畑川

19 櫛毛川 20 相割川 21 竹馬川 22 朽網川 23 貫川 24 大野川

25 田原川 26 長野川 27 板櫃川 28 天籟寺川 29 撥川 30 割子川

31 建郷川 32 中子川 33 金山川 34 新延川 35 白木川 36 金剛川

37 笹尾川 38 新々堀川 39 金手川 40 江川 41 坂井川 42 寺田川

43 原田川 44 相川 45 熊本川

③ 事業内容

(1) 北九州市内の海岸線及び河川流域パトロール（海岸線、河川美化清掃・ゴミ持ち帰り啓発）

(2) 水辺環境愛護団体等支援

④ 活動状況

(1) 北九州市内の海岸線パトロール

マリバー1号により、北九州市域内の海岸線、河川流域を巡回するためのパトロールルート、乗務員の勤務スケジュール策定や巡回頻度の検討を行いました。

各エリアにつき月／2回から4回程度の巡回を行うことを、計画・実施いたしました。

(2) ゴミ不法投棄監視・河川、海岸線護岸等の破損の監視

巡回を行う際に大型ゴミの不法投棄の監視、通報及び海岸線護岸の破損事故の監視、通報を行いました。

(3) 水辺愛護団体等支援

下記の通り、水辺愛護団体及び北九州市内の水辺に関する活動を行っている団体が主催するイベントへの出動を行い、ゴミ収集やマナー啓発・指導等の支援を行いました。

平成31年	4月20日	紫川アユ放流祭
令和元年	7月28日	若松区・響灘大清掃
〃	9月8日	八幡東区・大蔵川清掃
〃	9月28日	小倉南北区・紫川大清掃
〃	10月6日	若松区・脇田釣り栈橋 漁港清掃
〃	10月6日	八幡西区・金山川大清掃
〃	11月10日	小倉北区・「紫川ハゼ釣大会」大清掃
〃	10月19日	「関門釣りまつり」 門司区・大里漁港大清掃

⑤ 成果

ゴミの分別行動に見られるような市民意識の高まりに加え、20年以上に亘ってのマリバー号の実績や認知によって、市民に広く理解をいただき、多くの協力を得られるまでになっています。

II. 水生生物の生態研究及び保護・育成事業及び

海域の水産資源保護・増殖事業

この事業は、紫川の生態系の研究、アユの研究・保護、北九州市内でのメダカ・ホタルの保護及び、北九州市周辺海域の水産資源保護・育成を行う事業です。北九州市の豊かな自然環境の象徴として、小倉南区・小倉北区を流れ、響灘に注ぐ紫川があります。この川は、田園部と都市中心部を縦断しており生態系を考える上でも重要な価値があります。その中で、稚アユ放流につきましては、31年度（令和元年度）も例年通り実施しました。このアユ放流は地元住民や小学生など多くの市民参加によって開催され、今では地域の環境保全のシンボルとして位置付けられています。

また、前年の30年度は、DNA解析の手法を用いて、紫川の魚類全般について調査を行いました。31年度（令和元年度）は、環境DNA技術を用いた「紫川アユの分布状況の把握」を実施しました。

1. アユの生態研究・保護・育成事業

稚アユ放流

4月に恒例となっております「紫川アユ放流祭」を多数の市民のご協力のもと行い、福岡県より、ご協力頂いた福岡県産の稚アユ1万尾を放流しました。

水生生物の調査研究事業

- ① 平成31年度（令和元年度）の水生生物の調査研究事業は、「環境 DNA 技術を用いた紫川アユの分布状況の把握」を実施しました。

前年度は、紫川の魚類の多様性を把握するため、環境 DNA 技術を用いた調査を行いました。今年度は同じ環境 DNA 技術でも、特定の種の DNA を増幅、定量化する技術を用いて、紫川のアユの分布状況の把握を実施しました。

なお、本事業は昨年度と同様に北九州市立自然史博物館の日比野友亮学芸員（魚類担当）にアドバイス等をお願いいたしました。

- ② 調査位置

調査範囲は、汽水域からアユの生息が想定される紫川中流域とし、事前にアユの摂餌痕を確認したうえで、痕跡確認場所の下流側に採水地点を設定しました。なお、摂餌痕が未確認の区域は一定間隔で採水地点を設定し、合計20地点を設定しました。

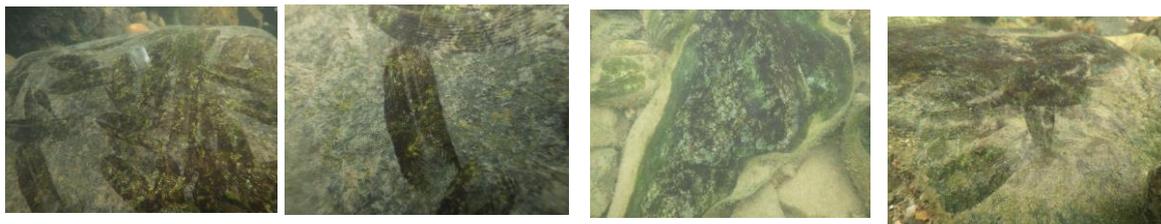
表 2-1 調査地点

区分	水域	地点番号	地点名（名称）
汽水域	紫川	St. 1	豊後橋
淡水域	紫川	St. 2	新日鐵取水堰
		St. 3	都市高速下
		St. 4	篠崎橋
		St. 5	大川歩道橋
		St. 6	今町小学校横
		St. 7	藪瀬橋
		St. 8	新川
		St. 9	清風橋
		St. 10	虹山大橋
		St. 11	紫橋
		St. 12	砂原橋
		St. 13	桜橋
		St. 14	徳吉橋
		St. 15	亀年橋
		東谷川	St. 16
		St. 17	志井
	紫川	St. 18	中西橋
合馬川	St. 19	合馬川	
紫川	St. 20	蛍の前橋	
地点数			

③実施内容

(1) アユ摂餌跡調査

摂餌跡調査の方法は、淡水区間の下流端となる新日鐵取水堰より上流に向かって、河川内を遡上しながら、川床の石に残った「アユの摂餌跡」を、箱メガネ又は水中メガネを用いて確認した。アユと推測される摂餌跡(笹の葉状)が確認された場合、概略の面積を記録しました。



摂餌跡(今町) 摂餌跡(今町_拡大) 摂餌跡(亀年橋) 摂餌跡(亀年橋_拡大)

(2) アユDNA濃度調査

試料採取は、各調査地点で表層水 1L を採水し、クーラーボックスに入れ、冷却して持ち帰りました。なお、サンプルにはDNAの分解を阻害するために 10%塩化ベンザルコニウム溶液を 1L あたり 1mL 入れました。また、輸送時のDNAの混入を確認するために、輸送時のクーラーボックスの中に、採水ボトルに脱イオン水を入れたクーラーブランクを入れました。なお、採水に用いるボトルは、次亜塩素酸ナトリウム漂白剤で洗浄し、DNAを含まない脱イオン水によって洗浄しました。

分析方法：リアルタイムPCRによる種特異的環境DNA分析

ガラスファイバーフィルターを用いて実験室で濾過

測定装置：サーモフィsherサイエンテック社リアルタイムPCR

QuantStudio3 (形式：QS-3-96F-TIP)



環境DNA採水(その1)



環境DNA採水(その2)

④結果

(1) アユ摂餌跡調査

淡水区間で河床のアユ摂餌跡を目視した結果、合計で約 144 m²の摂餌跡を確認しました。摂餌跡は平瀬内の局所的に流れが速く、人頭大程度以上の

石が存在する河床区間に点在しました。また、アユの摂餌跡がみられた区間は、環境啓発活動でアユの放流を行っている3地域の前後でした。

調査日：令和元年7月5日

No.	地点名称	摂餌跡の概略の 大きさ (m)	概略の採餌跡面積 (㎡)
1	都市高速下 (St3)	1 × 5	5
2		1 × 10	10
3	篠崎橋 (St4)	3 × 5	15
4		2 × 8	16
5	大川歩道橋 (St5)	2 × 2	4
6		1 × 1	1
7		1 × 1	1
8	今町小学校前 (St6)	1 × 6	6
9		1 × 1	1
10		1 × 3	3
11	紫橋 (St11)	1 × 1	1
12		1 × 10	10
13		1 × 1	1
14		1 × 1	1
15		1 × 3	3
16		1 × 10	10
17	桜橋 (St13)	5 × 5	25
18		1 × 1	1
19	徳吉東 (St14)	1 × 8	8
20		1 × 5	5
21	亀年橋 (St15)	1 × 5	5
22		1 × 10	10
23		1 × 2	2
合計面積			144㎡

※ はアユの採餌跡が広い地点を示す。

(2) アユDNA濃度調査

アユのDNA濃度は、定量の結果、不検出～3.2copies/mLの範囲であった。全体的に環境DNAの検出量は少なかった。また、定性の結果では、多くの地点で検出 (Positive) となりました。

表 4-2 アユの DNA 濃度分析結果

採水日：令和元年9月13日

No.	地点名	採水時間	水温 (°C)	定性結果	定量結果
					単位：copies/mL
St1	豊後橋	13:43	26.5	Positive	2.0
St2	新日鉄取水閘	13:56	26.5	Positive	2.0
St3	都市高速下	14:15	26.5	Positive	1.9
St4	篠崎橋	14:05	26.0	Positive	1.5
St5	大川歩道橋	14:30	26.5	Positive	1.6
St6	今町小学校	14:45	26.5	Positive	3.2
St7	藪瀬橋	15:00	26.0	Positive	2.1
St8	新川	15:17	26.0	Negative	-
St9	清風橋	15:10	26.0	Positive	1.1
St10	虹山大橋	15:32	26.0	Negative	-
St11	紫橋	15:43	26.0	Positive	1.7
St12	砂原橋	15:53	26.5	Positive	0.9
St13	桜橋	16:04	26.5	Positive	2.9
St14	徳吉東	16:25	26.0	Positive	1.3
St15	亀年橋	16:16	26.0	Positive	3.2
St16	東谷川	16:36	24.0	Negative	-
St17	志井	16:50	24.0	Negative	-
St18	中西橋	17:04	25.0	Positive	1.1
St19	合馬川	17:19	25.0	Negative	-
St20	蛍の前橋	17:28	25.0	Negative	-

※ はアユDNAの検出を示す。

(3)他の河川との比較

今回、同様の調査手法でアユの環境 DNA 濃度測定が実施されている「多摩川」、「高津川」、「佐波川」との比較を行いました。

平均 DNA 濃度で見ると、多摩川は紫川の 741 倍、佐波川は紫川の 37 倍、高津川は紫川の 17 倍と、紫川の環境 DNA 濃度は低かった。今回、アユの個体数推定値はなく、一概に比較はできませんが、調査時期が同じ 9 月である多摩川と紫川を比べ、幹川流路延長で約 7 倍、流域面積にして約 10 倍の差がみられるが、紫川のアユ現存量は、河川規模の差以上に少ないことが推測できました。

まとめ

(1)紫川における河床のアユ摂餌跡は、都市高速下 (St. 3) から、亀年橋 (St. 15) まで確認されました。

アユが生息する紫川中流域の広範囲は、水深が浅く、流れが緩やかな礫河床の平瀬区間が大部分を占め、河床の石には砂泥の付着や、餌となる藍藻類が生育しにくい浮石区間が広がっており、アユ成魚の餌場に適した環境が減少しているものと推察されました。

(2)アユの環境 DNA の検出範囲は、汽水域である豊前橋 (St. 1) から、中西橋 (St. 18) の区間で検出され、支川である新川、東谷川、合馬川では検出されなかった。全体的にアユの環境 DNA 濃度は各地点とも低かったが、アユの摂餌跡と環境 DNA の検出地点は概ね一致しました。

(3)多摩川、佐波川、高津川と紫川を比較した結果、紫川の幹川流路延長に比べ、多摩川は約 7 倍、佐波川は約 3 倍、高津川は約 4 倍の長さで、流域面積は、多摩川は約 11 倍、佐波川は約 4 倍、高津川は約 10 倍の広さであった。一方、アユの環境 DNA 濃度は多摩川で 741 倍、佐波川で 37 倍、高津川で 17 倍と、流路延長や流域面積と比べても、紫川のアユの環境 DNA 濃度は低い結果でした。

2. 水産資源保護・増殖事業

北九州周辺の海域水産資源保護・増殖につきましては、海水魚の稚魚の放流を市内各所で行い、資源の枯渇を食止め、保護・増殖に努めました。特に生態系に配慮し、クロダイ、ヒラメなどの周辺海域の固有種を放流いたしました。

Ⅲ. 河川及び海岸線愛護、水生生物の研究・増殖、水辺の青少年とのふれあい事業を行う団体に対する助成事業

当財団では、市民や環境保護団体の皆様と協力しあい、より美しく、自然豊かな北九州市の水辺環境づくりに取組んで行くために「クリーン・マリバー・ネットワーク」運動を提唱しています。一人一人の力だけでなく、また一団体の活動だけでなく、水辺の環境保全を大きなネットワークとして盛り上げていこうという事業です。このため、当財団では環境保全や水生生物保護などに関するPRや、事業活動を積極的に推進する一方、関係団体の活動にも資金援助や協力をさせていただき助成金制度を設けています。

この制度の愛称を“マリバーエイド”と呼び、当財団の趣旨に沿った事業の実施を目的として、活動実績を有し、北九州市に所在を置く任意団体、又は有志の調査・研究グループ（自治会、子供会、学校を含みます。）を対象としております。今年度も54団体、55事業に対し助成を行いました。

平成31年度（令和元年度）分類別助成事業

- ① 河川環境美化・清掃事業及び河川愛護団体との協力、ならびに支援事業
 - (1) 河川 北九州市内の河川（主として紫川）
 - (2) 区間 北九州市内域の全区間
 - (3) 助成団体 17団体
 - (4) 合計助成金額 2,226,581円
- ② 水辺の自然と青少年とのふれあい事業
 - (1) 事業概要 キャンプ教室・釣り大会・その他自然と親しむ水辺でのイベント
 - (2) 助成団体 13団体
 - (3) 合計助成金額 1,587,786円
- ③ 水生生物の生態研究並びに保護・育成事業
 - (1) 習性研究・遡上数調査
 - (2) アユの保護・メダカ・ホタル飼育
 - (3) 助成団体 11団体
 - (4) 合計助成金額 1,400,000円
- ④ 河川・海域の水産資源保護・増殖並びに沿岸域の環境美化事業
 - (1) 北九州市内の稚魚放流（主としてヒラメ・カサコなど）
 - (2) 北九州市沿岸域の環境美化・清掃
 - (3) 助成団体 2団体
 - (4) 合計助成金額 198,165円

⑤ その他

- (1) 環境教育事業
- (2) 海岸線緑化他
- (3) 助成団体 1 1 団体
- (4) 合計助成金額 1, 5 4 3, 3 0 0 円

総合計 5 4 団体 5 5 事業
 6, 9 5 5, 8 3 2 円

IV. 河川及び海岸線愛護、水生生物の研究増殖、水辺の自然と青少年とのふれあひに関するシンポジウム・環境教育

この事業は、公1、公2、公3の事業内容をより、一般市民へ広めていくために開催するシンポジウム、及び同様の主旨での子供たちへの環境教育活動を行う事業です。

1. シンポジウム

◇日時：令和元年11月9日（土） 9：30～12：00

◇場所：北九州市立商工貿易会館

◇参加：約250名

◇行程

①開会

② 理事長挨拶

③ 助成先紹介、目録贈呈、マリバー大賞発表並びに大賞団体報告

④ 日本環境設計株式会社 取締役会長 岩元 美智彦 氏

「循環型社会が生み出す「捨てない未来～」

当日は、商工貿易会館満席の250名近い市民が来場し、高宮理事長の挨拶に続いて、財団事業の大きな柱でもある助成金制度・マリバーエイドを受けている団体の活動紹介をスライドで行いました。

その後、助成先の中で、その活動内容が顕著であると認められた団体に「マリバー環境大賞」が授与いたしました。本年は、金山川の清掃活動を通して、河川愛護の心を育む活動とともに、防災や河川活用の為に、カメラを利用した野外活動を活発に行ったことから「八幡西カメラクラブ」が受賞され、団体代表者 松崎氏より活動の発表を頂きました。

その後の特別講演では、今世界的にも注目されている日本環境設計株式会社 取締役会長 岩元美智彦氏をお招きし、テーマ『循環型社会が生み出す「捨て

ない未来』と題してお話を頂いた。岩元会長は2015年には社会起業家の国際的なネットワークであるアショカ・フェローに日本人として5人目選ばれ、2017年には中小企業庁 長官賞を受賞されております。

2007年にリサイクル事業の会社（本社：東京）を立ち上げられ、北九州市と愛媛の今治市にリサイクル工場を運営されております。これまで、金・銀・銅・レアメタルといった燃えないものに対するリサイクル技術は進歩してきたが、衣類やプラスチック、家庭ごみ等の燃えるものに対するリサイクル技術が開発されていないこと、また、人間も石油も樹木も、炭素や水素、酸素といった元素等からできていることに注目して、元素や分子を循環させあらゆるものを劣化させずにリサイクルさせる技術を開発されました。現在では世界から注目される事業として成功をおさめられました。

また、『地下資源争奪紛争を終わらせるのはお金や武器ではなく、消費者参加型の循環型社会を作ること』という考えで、リサイクル事業を通じて全世界を平和にしたいという、大きなビジョンを掲げて活動されています。

岩元会長は、「皆リサイクルをすることは大事だとわかっているけど、実際の行動にうつすには、遊びの要素が必要である」とのお考えで、常に楽しく、わくわくするような事業で人の関心を寄せて継続させていくことを一番大切にされている。この取り組みはまさに明るい未来、SDGS 社会の実現につながっていくものと思われる。

今回のシンポジウムは、途中で帰る方もなく、アンケート全体でも非常に満足されていました。「大変参考になった、もっと先生の話詳しく聞きたい」という声を多く頂きました。もっとたくさんの人にこの現状を知ってもらいたいと思える、たいへん貴重な講演であり、環境保護等に関わる人たちにとっても非常に有益であったと思われまます。

当財団では、今後も環境保護への意識を向上させていく為に、このようなシンポジウムを続けて参ります。

2. 環境教育

① 今町小学校自然体験教室

「ふるさとの川・紫川を守ろう」

日時 7月14日(土)、15日(日)

② 大蔵小学校自然体験教室

「大蔵川の水生生物」

日時 9月8日(土)

大蔵小学校と協力をして「大蔵川環境教育」この事業は、授業の一環として、大蔵小学校の1～6年生の全校児童が参加し、環境教育と地元を流れる大蔵

川の清掃を行うイベントです。

川の清掃の前、大蔵小学校の児童に、環境ミュージアムのプログラムで環境について学んで頂きました。

V. 北九州市環境ミュージアムの運営

1 来館状況

令和元年度の総来館者数は、114,368人で前年比88%（平成30年度130,386名）と2月28日（金）～3月31日（火）に実施した新型コロナウイルス感染対応の臨時休館により昨年を下回る結果となりました。団体についても令和元年度は407件で前年比93%（平成30年度439件）と、下回る結果となりました。

来館者数について考察すると、スペースワールド閉園による市外からの修学旅行客の減少と、例年のない台風の接近による荒天による臨時休館等も、新型コロナウイルス感染防止の臨時休業に加えて来館者数減少につながったと考えられます。

しかし、そのような中でも集客努力として、従来からの努力に加え新しい試みも実施しました。従来からの取組としては、毎年恒例の「未来ホテルデー」や「ちょいエコホリデー」、夏休み企画等、エコライフ講座やエコクッキング、その他毎月実施している多様なワークショップや、地域と連携した「東田サマースクール」や「世界一行きたい科学広場」等を実施しました。

また新たな取り組みとして、介護施設などシニア客への対応として、環境ミュージアムのバリアフリーの設備などのPRに努めました。さらに外国人向けの対応としては、多言語ガイドが積極的に外国人の団体に対してのガイドに努めました。一方さらなる集客のために、環境関連団体の月例会等を環境ミュージアムで開催していただくよう誘致に力を入れております。また、本年度から本格的に動き出した東田ミュージアムパーク構想の三館連携企画展などが集客に大きく貢献した。環境ミュージアムで三館連携企画展として「イノベーションで拓く持続可能な紙の未来（ペーパーラボ）」（10月29日（火）～12月22日（日））を開催し、たくさんの来館者を得た（ペーパーラボは3月末まで展示）。本企画展の企画立案ならびにセイコーエプソン社、エプソン販売社との出展に関わる協議、調整は企画部（SDCC）として実施した。また、シンポジウムについては、小倉のまちづくりを考える会（環境委員会）の共催により開催で、実質的な集客も小倉のまちづくりを考える会で実施しましたが、これは、同会にエックス都市研究所が所属する環境委員会副委員長を務めていることによるものです。これまで来館ターゲットではなかった、ビジネスパーソンの集

客につなげたという意味で新たな可能性を拓く契機となったことは成果でした。今後東田地区全体で集客するための環境ミュージアムの役割をしっかりと認識し、近隣施設との連携を更に強化して行きたい。

さらに、2月1日（土）～3月31日（火）に開催した企画展「城山小学校展」には、城山小学校関係者を含め多くの来場者を集めた。城山小学校がすでに統廃合になっているので、途中で開催した「城山トークショー」は関係者がいろいろな思いで話をする場としても好評でした。

しかし、これらの集客に関する新たな努力にもかかわらず、新型コロナウイルス感染防止のために、2月28日（金）～3月31日（火）に臨時休館を余儀なくされ、来館者数は13万人の目標を達成することが出来なかった。

2 施設設置目的達成に向けた取り組み

2-1 利用者の増加を図る取り組み

指定管理事業、自主事業のイベントの充実、民間企業との連携、充実した企画展、三館連携に力を入れました。特に「北九州地球の道」については、各種連携企画の立案や富良野のガイドを招聘し、今後北九州らしい「地球の道」の開発に道筋が見えたと考えております。

2-2 施設の充実への取り組み

市内環境施設との連携、ミュージアムショップの充実へ向けた検討、共同事業体が持つ隣接施設の活用など、施設の充実に向けた活動に努めました。

2-3 職員能力向上への取り組み

職員の能力向上としては、来館者に対しガイディングを通して環境知識を提供するのみでなく、例えば帰宅後住居で分別などの環境行動を新たにするようになるなど、行動変容を促すことを目標としました。そして行動変容の評価の方法についても、情報を収集しました。

ガイドの中身としては、従来それほど重要視していませんでしたが、東田第一高炉の存続を目指した活動の歴史、環境ミュージアムが、東田という近代産業の発祥の地にある意味などについて教育を行いました。これは本年度の三館連携企画展で、産業都市北九州が取り上げられる予定ですので、重要な視点であると考えております。

人的交流としては、各種イベントを通じ、北九州市エコタウンセンター、北九州ESD協議会との交流に加え、5年振りに開催された北九州市学芸員研修などにも参加しました。さらに、増加しているシニア来館者に気持ちよく来館して

いいいただくために、社会福祉施設従事者研修、認知症サポーター研修を実施し、認知症の患者さんの特長などを学びました。

1月に韓国からの大学生インターンシップ生を1名、環境ミュージアムで受け入れた。ミュージアム職員の国際化、韓国語の習得に大変意義のあるインターンシップでした。

また10月26日に開催された東田サステナブル国際会議は、タカミヤ・マリバー環境保護財団の支援をいただき、環境ミュージアムの職員を含め、里山を考える会の職員が事務局を務め、国際会議の運営をとおして、人材育成に役立ちました。さらに11月9日に開催されたタカミヤ・マリバー環境保護シンポジウム「日本環境設計岩元会長講演会「循環型社会が生み出す『捨てない未来』」の広報に努めました。

一方、エックス都市研究所とも人材開発や、それに関連するミュージアムでの企画展の開催等について意見交換をして、2020年度の連携について議論いたしました。新入社員研修については、新たなターゲットとしての研修プログラム開発や、企画展立案への多様なメンバー参加を図る目的で企画されました。

2-4 営業・広報の取り組み

シニアの来館のため、ミュージアムのバリアフリーやトイレの充実などをPRするレターを作成しました。またPaperLab企画展、城山小学校企画展では、独自のチラシとポスターを作成し広報に努めた。特にPaperLabについては、多数の新聞社、雑誌、映像会社から取材があり、ミュージアムの認知度向上に貢献した。

3 利用者満足度向上に向けた取り組み

3-1 プログラムやイベントの充実

例年通り「未来ホタルデー」を環境月間の6月1日、2日開催しました。市民団体の活動紹介をはじめ、エコ工作体験、環境科学実験など、様々なイベントを実施した結果、3,791名が来場し大きな賑わいがありました。また、「ちょいエコホリデー」と題して、8月に世界一行きたい科学広場と併催、12月には植物をテーマに、3月はちびっこをテーマとした企画（臨時休業にて中止）をおこないました。今後も継続して実施し、環境啓発並びに市民活動の拠点となれるよう努めます。その他にも季節に応じて企画した、夏休み宿題企画やクリスマス（ハーブ講座）、正月などのイベントやエコライフ・ESDの啓発として染物講座、料理教室、エコ工作、科学実験、ドキュメンタリー映画の上映、など、

さまざまな視点から環境について考えるきっかけを与えるイベントを実施しました。

当館を含めた東田地域にある3つの博物館（北九州市環境ミュージアム、いのちのたび博物館、北九州イノベーションギャラリー）を連携させた恒例イベント「東田サマースクール」「世界一行きたい科学広場 2019in 北九州」を実施した。「東田サマースクール」は夏休みの小学校4年生以上の児童を対象に4日単位で、いのちのたび博物館、北九州イノベーションギャラリーと当館の3つの施設で連携し、各館が1日ずつ担当して特色あるプログラムを実施しました。当館では、館内見学をはじめ、地球の道体験、夏休みの宿題向けとしたエコ工作や環境3択クイズなどを実施し、参加者から大変よい評価を頂きました。「世界一行きたい科学広場 2019in 北九州」では3館とSSH指定校、九州工業大学や北九州高専らと協同で実施。本物の科学にふれる機会とその楽しさを伝えました。また、本年度はちよいエコホリデーを併催して実施し、ドームシアターでの映画上映、燃料電池自動車による外部給電実験、水を使ったおもしろ実験など、夏休みの自由研究のヒントになるイベントを実施しました。また、地域のまちづくりとして八幡まちづくり連絡協議会へ参加、地域の美化活動として毎年恒例の「夏の交流会」「賀詞交換会」などに参加、その他、当館が発起人である東田3館周辺を毎月第3水曜日に自主的に清掃する「5分間清掃」や八幡東区まつり起業祭の一環として行われる「八幡東田ウルトラ 25時間駅伝」への協賛や地域住民が開催する、町内会や茶話会への協力を行いました。また、地域イベントとして定着している、スポーツと自然との共生をテーマにした「北九州・平尾台トレイルランニングレース」や手作りをテーマにした「手作り市場 in 北九州」、八幡東区河内地区竹林の保全活動を行う「北九州里山トラスト会議」への運営協力を行いました。

3-2 プログラムの充実

受け入れ団体については市内外問わず、各団体の来館目的をヒアリングし、公害学習、ごみ問題、3R、環境問題など、幅広いオーダーに合わせた環境学習プログラムの提供を行い、団体見学の対応を行った。また、継続して実施している、教育委員会主催の環境アクティブ・ラーニングの受け入れや、環境修学旅行、環境局主催の古紙リサイクルバスツアーやプラスチックリサイクルバスツアー、行政視察など関係部署との連携を図り、円滑な対応を行った。そのほか、環境学習コンシェルジュとして環境学習における様々な問い合わせに対応を行った。個人・団体に関わらず、これまで蓄積したノウハウをもって北九州市内の環境学習相談や具体的な学習ツアーの提案を行った。さらにドコエコツアーを3月に2回計画した（臨時休業で中止）。1回は、小学生～成人向けを

対象にドコエコツアー「北九州の公害を学ぼう」（徒歩ツアー）で、環境ミュージアムにおける公害に関する説明、世界遺産「明治日本の産業革命遺産 製鉄・製鋼、造船、石炭産業」の構成資産である旧本事務所の展望スペースにおける観光ボランティアの公害に対する説明、いのちのたび博物館の歴史コーナーの公害関連展示（三六地区の社宅再現など）を巡るツアーを計画した。またもう一つは、小中学生を対象のバスツアーとして、ドコエコツアー「響灘の環境施設を見に行こう」の企画で、次世代エネルギーパーク、響灘ビオトープ、北九州エコタウンバス周遊するコースを計画した。しかしいずれも3月の実施を計画しており、新型コロナウイルス感染防止のために中止した。

3-3 新たな施設の活用

新たな施設の活用として、前年度で展示改修が完了し、世界遺産、SDG s の展示をはじめ、照明の増設・調光機能の追加等、展示エリアでのより細やかな企画が可能となった。これを受けて三館連携企画展では、「イノベーションで拓く持続可能な紙の未来（ペーパーラボ）」（10月29日（火）～12月22日（日））を開催し、来館者に持続可能な紙の未来を体感してもらうとともに、企業のSDG s の取り組みを紹介いたしました（ペーパーラボは3月末まで展示）。

4 指定管理業務に係る費用、収支の増加に向けた創意工夫

事業費の低減では、イベントに置いて参加企業のお持ちよりの参画を促した。また貸室については、集客効果にも寄与することから、様々な環境関連団体の使用をPRしました。

また自主事業では、適切な参加料で多数の方が参加できるようなイベントを多く実施いたしました。

5 管理運営体制等

職員に接客や障がい者対応ができるように研修を受講させた。また、地域・市民、教育機関、行政、企業との連携に関してきめ細かい対応を行った。特に民間企業との連携には、企業の商品・サービスの販売促進イベントにならないように、複数の企業の参画を募り、企業の製品から来館者がどのような刺激を受けるかをメインとする企画にするなど工夫しております。

6 安全危機管理体制

重大な館内事故・事件等の発生しておりません。その他、スタッフによる日常点検、定期点検等を行い、安心・安全な運営を行いました。その他、設備の老朽化が顕著になってきており、特に空調の不具合が多くなっている。空調が止

まると館の運営に支障をきたすので早期の対応をお願いしたい。今後も状況把握と報告を常に行い、迅速に対応できるよう努めます。